

平成 26 年度
全国公立大学学生大会

LINK topos

大学・地域における
学生・教員・職員の理想的な協働を考える
(公立大学学長会議同時開催)

報告書

期日 平成 26 年 10 月 11 日(土) ~ 12 日(日)

会場 兵庫県立大学 神戸商科キャンパス

人と防災未来センター内兵庫県立大学防災教育センター



公立大学学生ネットワーク

LINK topos

公立大学学生ネットワークと平成 26 年度全国公立大学学生大会

LINK topos

要旨

2014 年 10 月 11, 12 日に兵庫県立大学及び人と防災未来センターで平成 26 年度全国公立大学学生大会 LINK topos「大学・地域における学生・教員・職員の理想的な協働を考える」が開催された。全国の公立大学より学生、教員、職員 104 名が参加した。参加者は大学やその周辺地域の課題解決を目指し、より良い未来を創造するためのアクションプランを作成した。学生、教員、職員、この三者が協働して大学や地域の課題に本気で取り組み、大学として新たな可能性を大きく感じる 2 日間であった。この全国公立大学学生大会 LINK topos について、大会の背景、意義、目的、内容等を以下に記す。

1. 公立大学学生ネットワーク結成の背景と概要

1.1 公立大学学生ネットワーク結成の背景

平成 24 年 11 月に静岡県立大学にて開催された公立大学学長会議特別シンポジウム及びワークショップ「公立大学学生による被災地支援と地域防災活動」に参加した学生が結成した公立大学学生ネットワークは、平成 25 年 10 月に岩手県立大学にて開催された学長会議において、公立大学協会と共催、文部科学省の後援により全国公立大学学生大会 LINK topos「大学／学生と地域コミュニティの協働をデザインする」を開催した。34 大学 81 名の学生がシンポジウム及びワークショップに参加し、公立大学長と意見交換を行い、学生にとって非常に意義の高い大会となった(図 1、2)。



図 1、2 平成 25 年度全国公立大学学生大会 LINK topos でのシンポジウム(左)とワークショップ(右)

1.2 公立大学学生ネットワーク概要

公立大学に属し、被災地支援、地域防災、福祉支援など地域で活動を行っている学生のネットワークである。平成 24 年度 11 月の公立大学学長会議特別シンポジウム及びワークショップに参加した学生が中心となって創設した。平時において、学生間の交流、情報交換などを通して学生の地域における活動の促進、向上、そして活動を行う上での課題等の解決のための情報共有を目的とする。現在、facebook グループを介して 100 名ほど参加している。

1.3 これまでの取り組みと成果

平成 25 年度大会をきっかけに岩手県立大学の地域創造学習プログラムなどが生まれ、学生、教員、職員が協力して地域貢献活動に取り組む契機となった(図 3、4)。しかし、協働の形態や中身に関して学生・教員・職員が一堂に会し議論する機会はなかった。



図 3、4 地域創造学習プログラムでのワークショップ(左)と報告会(右)

公立大学学生ネットワークは、平成 25 年度大会後に各地区に地区代表をおくなど体制を整え、地区ごとに会議や大学合同の企画イベントなどを定期的に行い、平成 26 年度学生大会の開催に向け活動を続けていた。



図 5、6 地区ごとの会議(左)と大学合同の企画(右)

2. 公立大学学生ネットワークの意義

大学の役割は主に「研究」、「教育」、「地域貢献」である。とりわけ公立大学は、地方自治体が設置・運営・管理するという性格から、地域社会での知的・文化的拠点として中心的役割を担ってきた。今後、国内では人口減少と少子高齢化が急速に進展する。そのような状況の下、地域社会は様々な課題に直面すると考えられおり、公立大学の地域における社会・経済・文化への貢献はより一層、期待されているところである。

公立大学生は課外活動という形で、地域社会に向けて様々な貢献を行なってきた。これらの課外活動を大学の「地域貢献」を学生が学生の立場で行っているのだとすれば、地域での課外活動は、公立大学の存在意義の一翼を学生が担っていると考えられることができる。

公立大学学生ネットワークは、平成 25 年度より「全国公立大学学生大会 LINK topos」を開催してきた。この学生大会には様々な地域貢献活動を行なう全国の公立大学生が参加してきた。参加学生は、各大学の地域貢献活動の事例や地域の知の拠点としての公立大学の役割などの学びを通じ、公立大学や地域を多様な側面から考えるきっかけを得てきた。

岩手県立大学では、平成 25 年度大会をきっかけに地域創造学習プログラムが生まれ、学生・教員・職員が協力して地域貢献活動に取り組む契機となった。他にも、神戸外国語大学と神戸市看護大学との共同、大阪府立大学でも新たな地域貢献活動が生まれた。これらは大会に参加したことがきっかけで、学生が広い視野を身につけ、それが学内にも波及し、地域貢献活動を始めることになった良い例である。

「地域貢献」という公立大学の存在意義の一翼を担う学生にとって「全国公立大学学生大会 LINK topos」への参加は有益であり、学内にも良い影響を及ぼす可能性を秘めている。以上のことなどより、大会を継続し、開催していくことは公立大学にとっても大変有意義なことと考えられる。

平成 26 年度大会では学生に加え、教員と職員も参加対象に加えた。教員と職員の参加は大会テーマ「大学・地域における学生・教員・職員の理想的な協働を考える」に沿い学生、教員、職員の 3 者が協働の形態や中身について議論する際に必要であった。各プログラムでテーマに沿った課題を立場の異なる学生、教員、職員で一緒に考えることにより相互の理解や交流を深めることができると期待された。

3. 公立大学学生ネットワークの目的

公立大学学生ネットワークの目的は主に以下の 2 点である。

- ・各大学の地域貢献活動の事例や公立大学の役割などを学び、公立大学の存在意義を考え、意見交換すること。
- ・大会での学びを各大学や地域に還元させ、公立大学の地域貢献活動の一助とすること。

4. 平成 26 年度全国公立大学学生大会 大会プログラム

2014 年 10 月 11 日(土) 兵庫県立大学神戸商科キャンパス

時間	活動内容
9:00	受付開始
10:00~ 10:45	オープニング ・大会、団体説明 ・作業部会挨拶 兵庫県立大学 森永速男教授 ・自己紹介、アイスブレイク等
10:45~ 11:45	ワークショップ 「大学・地域における学生・教員・職員の理想的な協働を考える」
11:45~ 12:15	昼食
12:15~ 13:15	ポスターセッション 地域貢献における公立大学の取り組み
13:30~ 15:15	シンポジウム 公立大学と地域コミュニティの相互理解と連携 ~地域での実践的事例からその理想的な形を探る~ 第 1 部 基調講演 地域での実践事例紹介 初田直哉 兵庫県立大学大学院生 山本亜胡 岩手県立大学学生 辻辰幸 神戸市西区学園西町連合自治会長 第 2 部 パネルディスカッション パネリスト 基調講演者 3 名 司会 島谷奎汐 神戸市看護大学学生 井上幹太 兵庫県立大学学生
15:30~ 16:30	ワークショップ再開
16:30~ 17:00	ワークショップ中間報告会
17:30~ 19:30	情報交換会

2014年10月12日(日) 人と防災未来センター

時間	活動内容
10:00~ 12:00	ワークショップ再開
12:00~ 13:00	昼食
13:00~ 14:30	アクションプラン全体発表
14:50~ 15:40	活動の振り返り
15:40~ 16:20	クロージング ・大会振り返り動画の上映 ・作業部会先生総評 ・各地区で振り返り
16:30	現地解散

5. 平成26年度公立大学学生大会 活動内容とその成果

5.1 ワークショップ

大学、学年が異なる学生、そして教職員で構成される6~7名を1グループとして、計15グループを形成した。昨年と同様、アイスブレイクとして隣の人の名前を呼びながら手でバトンを回すようにタッチし、往復一週をするゲームのタイムを競った。タイム計測は数回行うとともに、前回のタイムを上回ることを目標に掲げた。そうして目標タイムが上がるにつれ、チーム内で結束を高められた。アイスブレイクを通して、チーム内の結束を高めるとともに目標を掲げて、それを達成しようとする姿勢の大切さを学んだ。そして目標をクリアしたときに高い達成感を感じるようになった。また、今回より各グループ名をそれぞれ決定してもらった。チーム名は、ポストイットを用いて各自の意見を出し合い、それらをまとめて議論しながら決定する。その一連の流れから発散した意見を収束させる難しさを参加者に体感してもらった。それと同時に、どうすれば意見をまとめられるのかをチーム内で考える時間にもなった。これは、アイスブレイクと相まって、チーム内の共通理解が一層、促される結果となった。

「大学・地域における学生・教員・職員の理想的な協働を考える」をテーマに、自分たちが地域に帰ってから本気で取り組みたい企画を各グループで話し合い、アクションプランを1つ設定した。アクションプランの設定には事前にワークシートを用いて、その項目に沿って行われた。アクションプランの需要、必要となるシーン、ターゲットを設定するところから始め、解決した課題を明確にするところからスタートした。そこから、5W2Hに沿ってまとめ、発想の企画化を行った。話し合いでは付箋を用いて自由に意見を書きだしていった。作業はお菓子を囲みながら温かな雰囲気の下で行われた。途中、中間報告を挟み、他グループの企画を報告し合う時間も設けた。そしてコメント等を付箋に書き込み、他のアクションプランに対して献身的な意見を出し合うこと、そしてその意見を企画に取り込むことを参加者に促した。それは自分たちの企画を多角的な視点で見つめ直し、より洗練させるためである。最終的には15個のアクションプランが完成し、地域の課題を解決し、未来を創造するものとなった。最後、最終発表を行い、参加者間の投票で最優秀企画1つ選出した。



図7、8 グループワーク(左)と振り返り会(右)

5.2 ポスターセッション

本大会に参加した学生、教員、職員画日々の地域貢献の取り組みについて1枚のポスターにまとめ紹介、情報・意見交換を行った。このポスター発表によって全国で行われている様々な地域貢献活動を一度に見ることができた。また参加者同士で自由に意見交換し合い、自分たちの今後の活動に新たな発見、気づきを得る場にもなった。このポスターセッションは学生会議と並行して行われた学長会議の昼休みに行った。そのため学生や教職員の参加者だけでなく学長はじめも自由に見て回ることができ、その結果様々な大学関係者と交流できる時間となった。



図 11、12 ポスターセッション(左) (右)

5.3 シンポジウム

「公立大学と地域コミュニティの相互の理解と連携」と題し、公開シンポジウムを行った。このシンポジウムの目的は学生、教員、職員、住民がシンポジウムを通じて相手の立場や強みを理解し合うことと、協働による課題解決という考えを深めることにある。シンポジウムの前半は基調講演を行った。講演者には兵庫県立大学大学院経済学研究科に在籍し神戸市にある明舞団地で地域活性活動を行う初田直也氏、岩手県立大学に在籍しボランティアセンターの運営を行う山本亜胡氏、神戸市西町学園西町連合自治会長である辻辰幸氏を招き、日頃の取り組みについて伺った。

シンポジウム後半には基調講演者 3 名によるパネルディスカッションが行われた。それぞれが活動を行う際の、立場の異なる人との協働の重要性について意見交換を行った。パネルディスカッションでは、講演者と会場の学生、教職員の間で積極的に質疑応答が行われ、終始熱い議論が交わされた。参加者は地域貢献の実践的な事例を学ぶとともに、協働による課題解決という考えを深めた。学生、教員、職員、住民が大学や地域の活動で協働できるという自己効力感が得られた場と言える。



図 9、10 初田氏の講演(左)とパネルディスカッション(右)

5.4 情報交換会

学生大会の参加者、学長会議参加者、総勢約 170 名あまりが、食事をしながら自由に交流した。学生は普段、話す機会のない学長と顔を合わせて話し合い、自分たちの活動を伝え、また学長や教員、職員は学生の声を直接、聞くことができるため双方にとって非常に有意義な時間となった。情報交換会の最後、公立大学学生ネットワークを代表して兵庫県立大学の井上幹太が大会報告や大会開催への協力対してのお礼を述べた。



図 11、12 懇談の様子(左)と近畿地区学生代表の挨拶(右)

6. 参加者の声

6.1 ワークショップ

- ・ワークショップのコツも事前に教えていただいたのでやりやすかったです。
- ・様々な大学の学生や職員が入り混じったチームだったので、様々な価値観を持った人に出会い視野が広がったのでよかった。
- ・自分の持っていない考え方に出会えた。
- ・自分の大学や地域の問題について、他大学の方の意見を参考に考えることができた。
- ・学生の生活が感じられて、心がリフレッシュされた。

6.2 ポスターセッション

- ・多様な専門性とフィールド、大学ごとの活動の種類や特徴の違いや全国の皆さんの熱意を見ることができた。
- ・各大学での地域での活動を知ることができ、楽に話をしながら色々な大学の話が聞けた。
- ・緊張感がない雰囲気がとてもよかった。
- ・他大学独自の活動方法が見ることができた。大学行事の一環だけでなく、サークル内での取り組みなどもあり、他の大学の学生がどのような活動をしているのか知ることができ、新鮮であった。

6.3 シンポジウム

- ・学生・自治会・プロそれぞれの立場の意見が聞けたこと。3者の3つの視点から見ることができた。
- ・学生だけでなく、職員、教員の人も本気でレスポンスしていたところ。
- ・地域貢献活動について興味深い話をたくさん聞くことができた。また、学生の意見と講演者とのやりとりがあるシンポジウムを初めてみたので、とても新鮮であった。

6.4 情報交換会

- ・学長先生が気さくに話しかけて下さって、学生たちもより交流ができた。
- ・大学の活動について深く、より詳しく話してくれてよかった。学長と初めて会話することで職員との仲が深まったような気がしました。
- ・全国の学生や教員が一同に会する機会はあまりないので貴重です。先生方がおっしゃっていたように続けていってほしい。

6.5 大会を通して

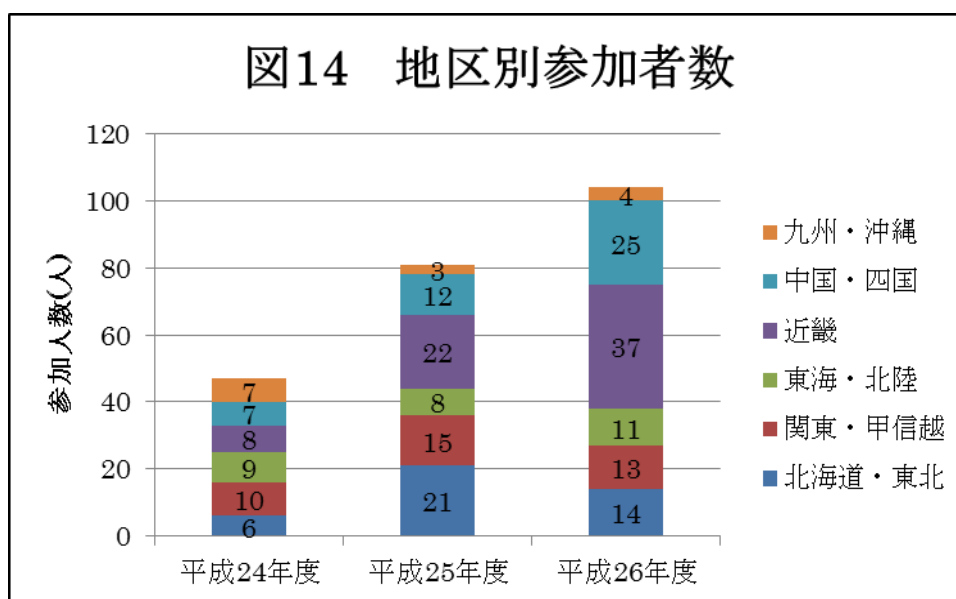
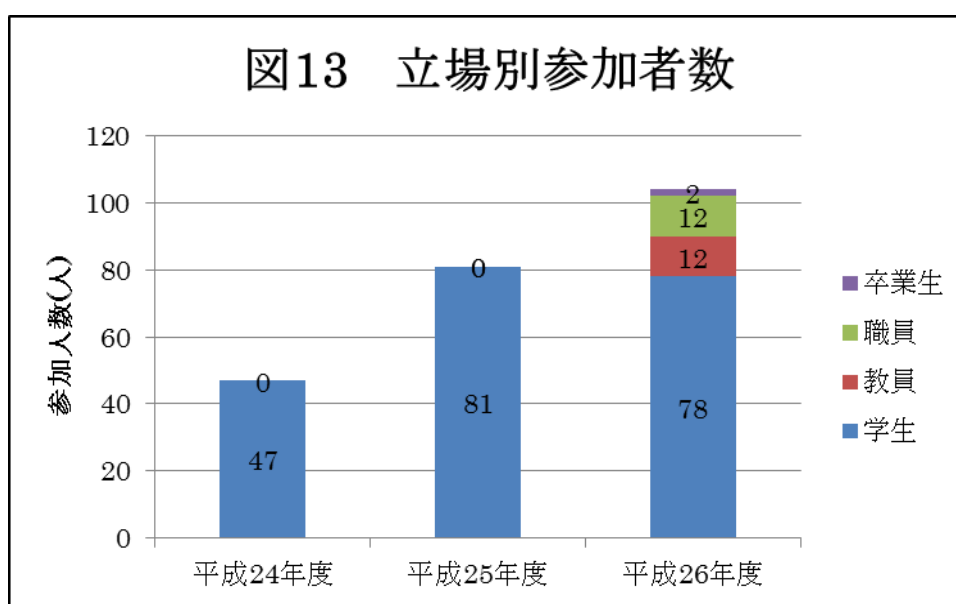
- ・実際に自分たちの地元に帰ってから、ワークショップで得たアイデアを参考にしたい。
- ・同じように地域と交流しながら活動している他団体と出会えて心強く感じた。
- ・自分の団体でも活かせるような広報活動やイベントに関してのアイデアを得ることができたので早速、活用したい。
- ・意欲のある学生がたくさんいることがわかりました。学生の力だけでなく、学生・教員・職員の三者協働の強い力を感じ、自分も職員として何ができるか、というところを考え始めた。地域と関わって仕事をしていきたい。
- ・たった2日間ではあったが、様々な人と触れ合う中で自分の考えを深めることができた。改めて、また1年間のスタートだと感じた。
- ・参加者の皆さんの熱意に触れられたことがとてもよかったです。
- ・職員として自分のすべきことが見えてきた。見知らぬ学生の集まりは嫌いですがLINK toposは好きです。

6.6 大会運営学生の声

- ・大会の準備、運営を通してテーマである協働を一層、体感できた。
- ・大会がきっかけとなり、その後、学長先生と交流することになった。大学のことをより知った。
- ・学生、教職員が一体となる機運が学内で高まった。今後の自分たちの地域貢献活動に大きな可能性が生まれた。

7. 参加者の対象と推移

今回の全国公立大学学生大会には地域貢献活動やそういった研究を行っている学生団体、サークル、ゼミ等の学生、もしくはそれらに興味を持つ学生、教員、職員が参加した。また公立大学学生大会への参加者数は、平成24年度は24大学47名、平成25年度は34大学81名、平成26年度は33大学104名と推移している。参加者の氏名や大学名などは付録1にまとめた。また、立場別参加者数を図12、地区別参加者数を図13にまとめた。過去3年間において、参加者は増加傾向にあることが分かる。この学生大会に対しての知名度が上がるとともに、期待も高まっていると言える。今後とも継続して大会の開催を強く感じさせる結果となった。



8. 謝辞

平成 26 年度全国公立大学学生大会 LINK topos の開催に際して、様々なご指導を頂きました公立大学協会学生支援作業部会の先生方、公立大学協会の皆様に深謝いたします。さらに、開催校として会場運営に協力して頂きました兵庫県立大学の職員の皆様に感謝いたします。最後に、本大会を盛会として終えることができたのは、地区代表や地区副代表の尽力や、参加して頂いた学生・教員・職員・学長の皆様の協力のおかげであります。協力して頂いた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。

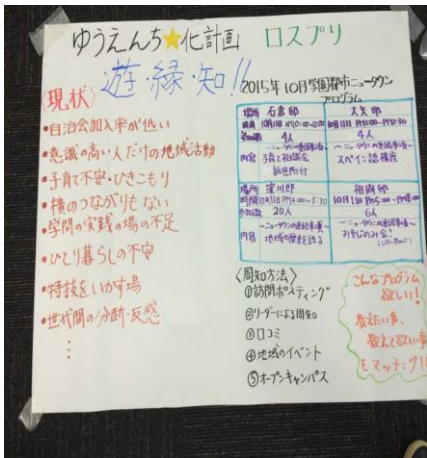
大阪府立大学修士 2 回生
公立大学学生ネットワーク代表
荒木 尊士

9. 付録 アクションプラン概要一覧

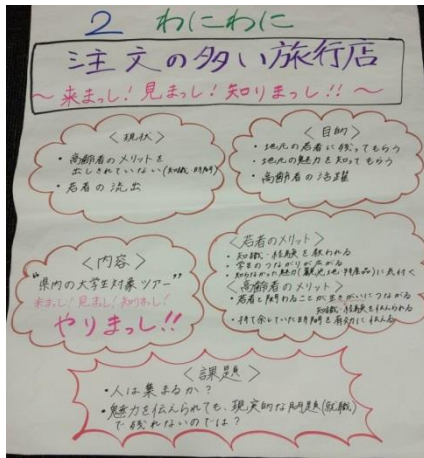
班番号	タイトル	企画内容
1	ゆうえんち(遊縁知)★化計画	ニュータウンを遊園地化する。そこで、自分の趣味などの知識の交流・相談会を行う。話し合いの場所や相談など各個人のしたいことを実現できる場づくりを目指す。
2	注文の多い旅行店 ～来まっし、見まっし、知りまっし～	地元の若者に魅力を感じてもらうため、県内の大学生を対象にツアーを行う。住んでいる人から参加者へ魅力を伝えることで、地元の観光地に行ったり、住民と繋がるきっかけづくりを行う。
3	皆でワクワク鬼ごっこ!!	遊びたいこども(傷害のあるなし関係なく)×大学生、親、教員、医療職といっしょに鬼ごっこを行う。随時ルールを変更可能として、自分たちでルールを作っていく。
4	地域の接着剤になり隊!!	地元の高齢者、子ども等の住民と一緒にゲートボール大会を行う。地元住民と話す場づくりや大学生が子どもの見守り効果を促す。
5	まちまっちゃんぐ	地域で活動している団体の情報を1箇所をまとめた情報媒体を作成する。それを用いて、ごはん会や説明会などを企画して人と人とのつながりもつくっていく。
6	健康診断で高齢者に憩いの場をデザイン!	高齢者の社会的孤立の予防・解消を目的として、定期的な健康診断を行う。それと同時にアロママッサージ、ネイルや伝統工芸を販売したりして、大学生や住民あるいは住民間の交流を促す。
7	「あなたの心に地域を～」授業化計画	地域活動を行う大学生による大学等で授業を行う。地域の方をゲストとして招き、既存の問題やこれからの課題について考えていく。
8	MAI ～マジで阿蘇行きたいよ!～	阿蘇地域の活性に向けて、田舎・農業に興味がある人を集め、体験学習型ツアーを行う。企画は大学生・地元住民が行う。SNS等を用いて阿蘇の魅力を常に発信する。

班番号	タイトル	企画内容
9	カフェから始まる地域防災	災害対応において住民間で顔のみえる関係が大切であることから、月1回にカフェを開く。そして、年に一度防災訓練を行い、模擬避難所体験を行う。
10	見る知る学ぶみんなでまち歩き	大学生と教員が地元に出張して授業を行う。大学生が企画した街歩きなどを行い、地域の輪を広げていく。
11	ムラ来ん？	街にある空き店舗を拠点として、地域の人・学生が集って交流の場にする。そこで、地域の人と郷土料理を作ったり、地域の人と学生が交流できる場を作る。
12	わが町魅力発見列車	地域の魅力(人・場所・特産物など)を発信する広告を作る。駅のホームや電車の広告させてもらい、地域に関心を持つ人を増やす。
13	出張！大学祭	大学、地元住民が一体となって出張で大学祭を行う。場所は商店街や公園等で行い、地域の方に大学が何をしているのかを知ってもらう。
14	小さい空きみつけた	空き家・空き部屋の利用した地域の居場所づくり。学生や院生、教員のフィールドワークの場所としたり、コミュニティセンターも開設して地域のネットワーク形成を促す。
15	防いでガッテン！	大学が地域の祭りに出店する。クイズコーナーを設けて、地元の人たちに災害について知ったり、防災を意識してもらう。

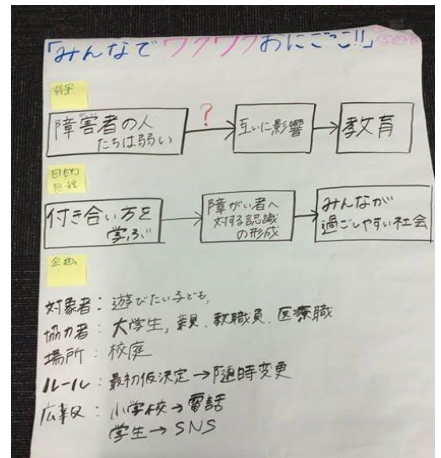
10. 付録 アクションプラン 写真一覧



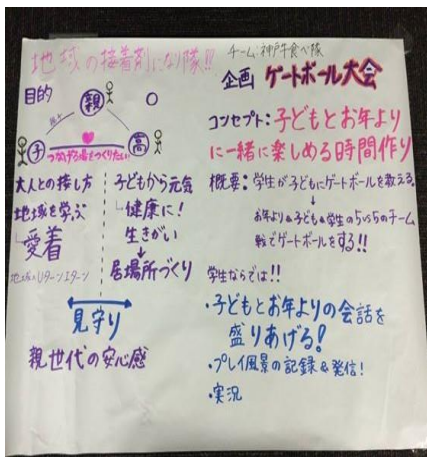
グループ①



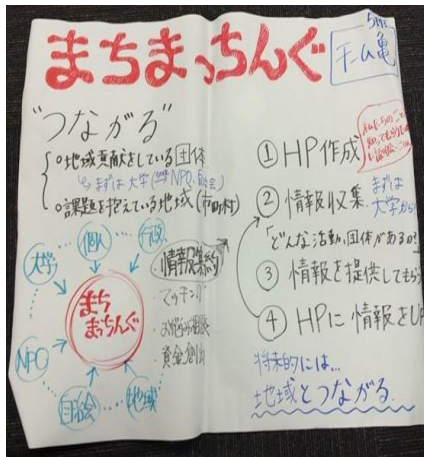
グループ②



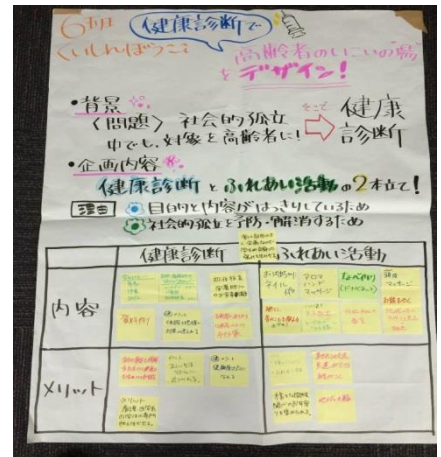
グループ③



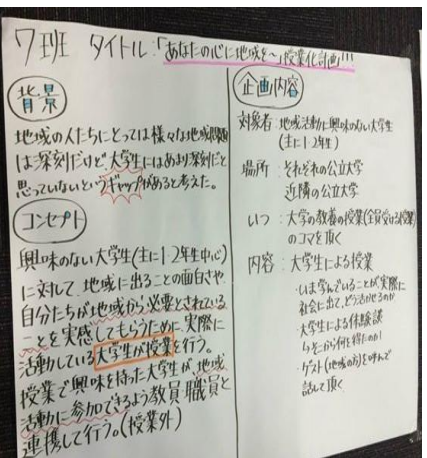
グループ④



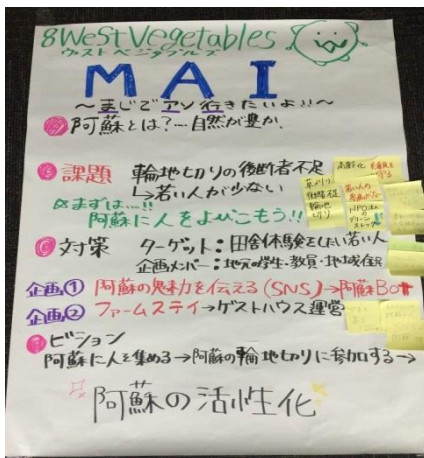
グループ⑤



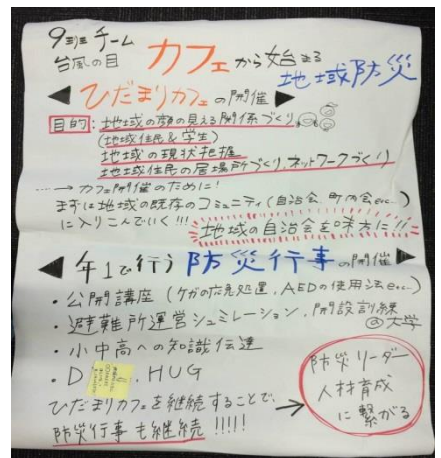
グループ⑥



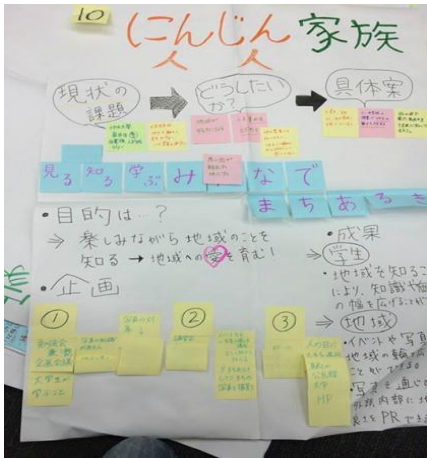
グループ⑦



グループ⑧



グループ⑨



グループ⑩



グループ⑪



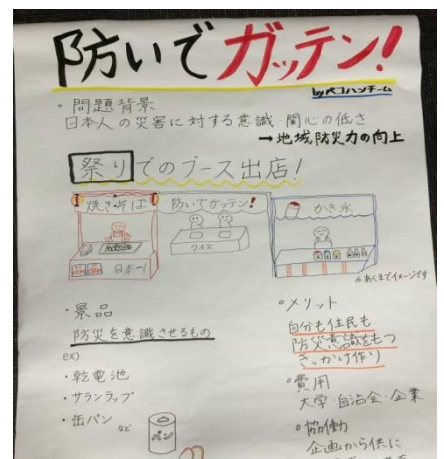
グループ⑫



グループ⑬



グループ⑭



グループ⑮

11. 付録 参加者名簿

※ Web掲載版では省略

全体 104 名
内訳 学生 78 名
教員 12 名
職員 12 名
卒業生 2 名

12. 付録

平成26年度公立大学学生ネットワーク支援に関する作業部会について

委員

	所 属 ・ 役 職	氏 名	専 門 分 野
主 査	兵 庫 県 立 大 学 教 授	森 永 速 男	地球物理学
委 員	岩 手 県 立 大 学 高等教育推進センター長	佐 々 木 民 夫	日本文学
〃	大 阪 府 立 大 学 副 学 長	竹 内 正 吉	獣医薬理学
〃	大 阪 市 立 大 学 副 学 長	宮 野 道 雄	居住安全人間工学
〃	公 立 大 学 協 会 事 務 局 長	中 田 晃	

13. 付録 公立大学学生ネットワーク 各地区体制

※ Web掲載版では省略

14. 付録 公立大学学生ネットワークの今後の展開について

14.1 情報共有、発信について

・ Facebook ページについて

昨年に引き続いて、学生大会で作成したアクションプランや、出会った他大学の学生との協働、活動などを誰でも発信できるようにする。今後とも活動ノウハウの共有や情報交換を活性化し、ネットワークの可能性を高めていきたい。

・ HP の活用方法

HP を使い定期的な情報発信を行う。ネットワークの活動等を広報していく。具体的な発信内容としては地区ミーティングの様子や参加しているメンバーの大学や活動紹介等を検討している。

14.2 学内 LINK topos の開催促進

全国公立大学学生大会の成果である大学内における学生、教員、職員の協働の重要性をより多くの公立大学関係者に体感してもらう。そのために、学内での LINK topos 開催を促す。

14.3 口座の開講

次年度以降の学生たちをサポートするために公立大学学生ネットワークの口座開設を検討する。ネットワークには経理部門を設け、監査役としてネットワークを支援する作業部会のどなたかをお願いする（年一度の会計監査・会計報告を行う）。資金は LINK topos の運営費等にあてる。

14.5 次年度の全国大会開催について

今後、継続的に LINK topos を開催したいと考えている。公立大学協会、作業部会と検討した上で、開催が決定した場合はその旨を HP 等に掲載し、facebook 等でも周知する。